

「ライブは僕のオリジナリティ。音楽を通じて至福の時を味わう」

萩本修一

多くの音楽人が学生を卒業するとともにライブ活動をやめる中、会社員になつても続けるミュージシャンがいる。なぜ、音楽を続けるのか。充実感満れる生き方を語ってもらおう。



1965年3月群馬県生まれ。大学卒業後、商社に勤める傍ら、エディ・萩本として音楽活動を続ける。アマでありますながら、ソロライブ活動を展開しオリジナルソングを中心とした「First Movement」「Everlasting Summer」を作曲した。その後、音楽活動を離れていたが、2000年から再び活動を開始。現在はソロライブ活動を主に行っている。

就職すると、ライブ、音楽をやめる人が多いですが、続けてきたという人は? 萩本 オリジナルを書くようになって、音楽の本当の面白さ、奥深さ、音を操る難しさを知つて、本当の意味でやめられなくなりました。私の知つている人でも、やめてしまつた人がいますが、特に、ピアノを小さい頃からやつて、学校を卒業したら一緒にピアノもやめてしまつたという人が多い。それなどいい例ですけど、結局、日本の教育と同じで、通り一遍のことしか教えないから、バイエルが終わりました。じゃあ、終わりですって感じで、本当の音楽の面白さ、奥深さといったものを結局知らずに通り一遍のことをして終わってしまう。私にとっては、音楽は「こんなのようなもので、こんなは食べずにはいられませんよね」と同じでやらずにはいられない。

仕事をしながら、音楽活動の時間も作つて……。

萩本 学生の時に比べて自分の時間というのは少なくなりますけど、時間は自分で作り出すものであつて、自分にとつて尊いものであれば、どんなにきつくても絶対時間というものはできると思うんですね。だから

私はテレビを見る時間もないですし、中々くつろぐ時間もないけど、それでも充実しています。自分の好きなことであれば、精神的に全然ハードさ、つらさを感じないし。

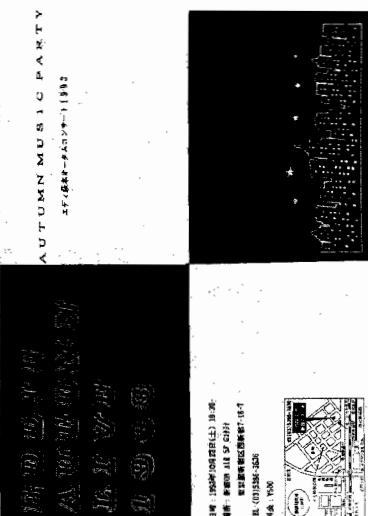
いつ頃から音楽を始めたのですか。

萩本 十三歳の時に、ギターを始めてからです。その頃フォークが流行つて、ギターが弾けると女の子にもてるといった状況もあって(笑)。なぜか、クラシックから入つたんですけど、そのため楽譜が読めるようになつたのは良かったと思ひます。高校から友達とバンドを組んで、ロック中心で、

ライブも始めました。大学で、フェスティバル、ロック、ポップス等いろいろやるようになつたんです。大学生活は忙しく、ESL、テニスと、バンド以外のことでもやつていました。割と講義の方もまじめに出る学生だったんですよ、何を隠そう(笑)。ハイスクールばかりの生活ではなかつたですね。学生時代にしかできないことをやりたいと思っていましたから。会社に入り、自分のオリジナルの曲をやるようになつて、バンドのメンバー各々の時間のスケジュール、嗜好性、テクニックとかの問題が出てきて、活動が中々うまく続かないし、最近はコンピューター等で一人でもいろいろできるようになつて、それなら、と一人で始めました。ギター以外はコンピューター等でやつています。二十五歳ぐらいの時からですね。

これまでに作った曲はどれくらいに? 萩本 四十曲くらいかな。七割がインスト(歌詞なしの曲)で三割が歌詞つきの曲です。インストは、七割がフェンスジョンで、ボサノバ風、ジャズっぽいのも中に入り、後の三割は、メロディに歌詞をつけたものです。ソロギターだとクラシックも弾くことがあります。最近のポピュラーミュージックをア

▼今年の10月23日に新宿ON AIRのスタジオにて秋のライブを行なう。新しいオリジナル曲も披露する予定



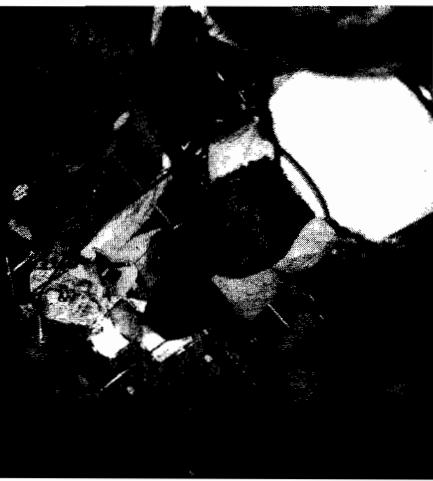
レンジしてやつたりもしています。

ライブのステージは、萩本さんにとってどんなものですか?

萩本 重要な私の自己表現の場、私の人生における一つのステージでもあるし、アイデンティティの一つでもあると思う。

ライブまで、どれくらいの時間をかけるのですか?

萩本 莫大な時間とエネルギーを注いでいます。作曲、アレンジ、各パートの演奏、プログラミング、ステージングまで全部自



▲今年5月の新宿でのライブ。楽しいおしゃべりもある

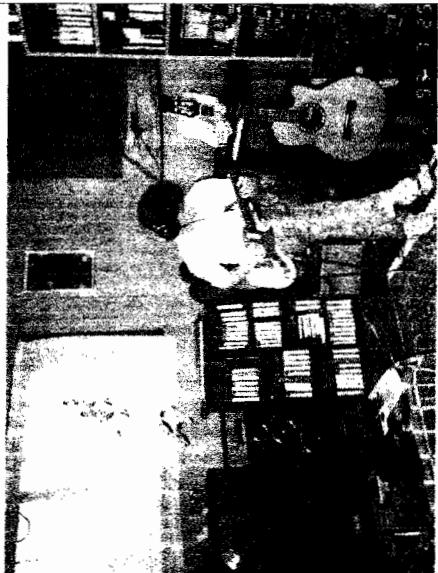
自分でやり、ライブにのぞむわけですから。例えば、オリンピックの選手と同じだと思います。オリンピックのために、何年も時間をかけて練習して、一瞬の技にすべてが集約される。私の場合は似ていて、ライブは私のオリンピックのようなものですね。一人でやっていることもあって、非常にハードであるけれども、非常にやりがいがあります。だから、聴く人も一人倍どころか人十倍くらいではないかな。

——ライブを見ていて、表情もいきいきしているし、萩本さんにとつてライブは至福の時ではないか、そういう時があるというのにはいいなと思いました。

萩本 社会人になると、自分の時間が制約されてしまい、忙しい忙しいと、時間にも人にも流されてしまいかちです。そんな中、燃えられるものがあるという人は幸せに思っています。ライブをやっている時は私自身生きているという実感をもてます。ある種のエクスタシーもあるかな(笑)。

——それだけ時間を費やして一生懸命やつても、ライブでは、料金をそんなに取らないですよね。

萩本 每回大赤字なんですね。僕にと



▲自宅でアルバム制作中

——萩本さんの曲を聴いていて、夢を感じさせるものがあります。曲の中に夢があると。生き方においても、そうなのではないですか。

萩本 忙しさに追われると考え方も皮相的になりますがちですが、豊かな心でありたいし、没頭できる音楽を通して、夢、ロマンを常にもって生きたいな。すべての曲に夢があり、その夢、イメージに向かって努力、前進する姿に人間らしさがある。アートの場合、夢というのは叶えづらく、莫大なもので限りない。一つひとつの作品が夢であり、コンセプチュアルなものもあります。

——音楽活動に対する抱負を。

萩本 当分はまだまだ一人でも勉強することがあると思うので納得の行くまでソロで頑張っていきたい。音楽に反映できるのは、音楽的経験だけでなく、人間的経験も出ますから、それを積んで人間的にもっと成長したいと思っています。死ぬまで、燃えられる音楽をやり続けていると思います。

——一生、続けたいと。

萩本 一生続けますし、やめられないんじゃないでしょうかね(笑)、ごはんと同じですから。

(多)

つて自分の作品が批判されることよりも、誰にも聽かれずに埋もれてしまうのが一番寂しいことなんです。お金の問題ではなく、お金に代えられない経験を自分自身積んでいると思う。また、音楽に限らずアートというものはお金に代えられない。

——ライブを通して、反省したことや、発見したことが次回のライブへの課題になって、それをクリアすることによって自分自身成長ができる。また、お客様によかった、楽しかったと言つてもらえることが何よりですし、次回の励みにつながっていきます。